

まるびい _____

みらいカフェだより

①はじめに ② Bees

Club ③ 明後日朝顔

プロジェクト ④ みら

い畑 ⑤ 院内学級 ⑥

SIDE CORE ととも

に「野焼き」 ⑦ 交流

課スタッフより ⑧ 編

集後記 2024 ▶ 2025

はじめに

まるびい(金沢21世紀美術館の愛称)では、市民の皆さんとともに未来を思い描き、地域のつながりを育む取り組みを進めてきました。その一つが「まるびい みらいカフェ」です。2014年度から続くこの活動は、年齢や立場の異なるさまざまな人々が集まり、美術館やまちの未来について語り合いながら、思わずワクワク、ドキドキするようなアイデアを出し合い、実際の企画として形にしてきました。

ボランティアによるメンバーは代替わりもしながら、この数年間では、「明後日朝顔プロジェクト」に取り組んだり、「みらい畑」で思い思いの作物を育てたり、病気で長期入院している子どもたちに美術館を紹介する「院内学級」などを実施しました。そして2024年・2025年には、新たな試みとして、ニホンミツバチの飼育を行いました。ミツバチの世話を担ったのは、メンバー内のグループ「Bees Club」です。Bees Clubでは、子どもたちを対象にした花粉団子の観察会やハチミツの採取、蜜蝋づくり、さらにそれを使ったハンドクリームや料理づくりなど、教育や自然環境について考えるきっかけとなる活動を行いました。また、メンバー自身が楽しむだけでなく、一般の方々ともイベントを通じて交流し、情報を共有しながら、活動の楽しさや大切さを共感してもらう取り組みも続けてきました。特に、2024年1月1日の能登半島を中心とした震災を経て、美術館を活かした人と街の結びつきについて考える機会も多くありました。

この度、2024年～2025年の活動の歩みをまとめ、より多くの人に伝えるために、「まるびい みらいカフェだより」を発行します。どうぞお楽しみください。

交流課プログラム・コーディネーター 王 馨怡



② Bees Club・・・6p



③ 明後日朝顔プロジェクト・・・24p



④ みらい畑・・・30p



⑤ 院内学級・・・34p



⑥ SIDE CORE とともに「野焼き」・・・36p

目次

1 はじめに	3
2 特集 Bees Club	6
活動のあゆみ	8
そもそものはじまりは…	10
ミツバチというのはどんな生き物なのか？専門家にきいてみた…	12
巣箱の掃除隊（ビーキーパー）結成！	14
ミツバチといえばやっぱり…	16
蜜蝋の利用法いろいろ	18
ミクロの世界！花粉アート！金沢の自然を知る！	20
さあ、飛騨高山へ	22
高山からのお便り	23
3 明後日朝顔プロジェクト	24
朝顔の栽培	26
明後日朝顔全国会議	27
タネの配布	28
4 みらい畑	30
5 院内学級	34
6 SIDE COREとともに「野焼き」	36
7 交流課スタッフより	38
8 編集後記	39

Bees Club



Bees Clubでは、まるびいで飼育するニホンミツバチを、その愛称にちなんで「まるびいず (bees)」と名付け、1年半にわたり活動を行いました。ミツバチの知恵や花粉の形・構造に驚き、思いもよらない美しい世界を目の当たりにすることで、自然や科学への関心が一層高まりました。活動を通して、美術館が市街地にありながらもニホンミツバチを理想的な環境で飼育できることを実感し、金沢というまちが豊かな自然を内包していることにあらためて気づかされました。子どもから大人まで幅広い世代が参加し、楽しみながら自然の営みに触れる貴重な機会となりました。

まるびいずの2025年10月の岐阜県高山市への引っ越しと、これまでの活動のまとめをもって、本プロジェクトは無事完了いたしました。Bees Clubでの活動は、メンバーにとってかけがえのない経験になったと思います。ここで得た学びや出会いが、それぞれの次の一歩につながっていけば嬉しいです。

本プロジェクトをご支援いただいた皆さまに、心より御礼申し上げます。

メンバー 平尾 敦

ミツバチのお世話についての講習会。白い防護服にみんな大興奮!



活動のあゆみ



2024

2025

4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

・巣箱の設置

・まるびいず搬入
・初会合
・ボランティア説明会

・花探し
・缶バッチづくり
・蜜蝋ワークショップ

・蜜蝋クリームづくり

↑ オープンまるびい

・蜜蝋ビンづくり
・採蜜
・振り返りの会

・蜜蝋ラップ

・野焼き SIDE CORE
・巣箱掃除隊始動

・ボランティア説明会
・巣箱作製

・巣箱増築

・マッピング勉強会

・花粉観察イベント1

・採蜜

・まるびいず高山へ引越す

↑ オープンまるびい

・振り返りの会



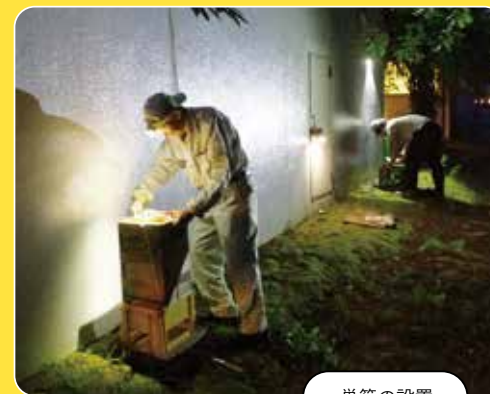
そもそものはじまりは…

2024年6月から10月まで、まるびいで開催された展覧会「Lines — 意識の流れに合わせる」では、流れ・つながりをテーマに、国内外のアーティストによるインスタレーションや映像、彫刻など、多彩な作品が展示されました。その出展作家の一人、Marguerite Humeauは、昆虫の集団行動に深い関心を寄せ、彫刻や映像作品に反映させています。これらの作品にちなんで、自ら敷地内でミツバチの飼育を始めることに!?

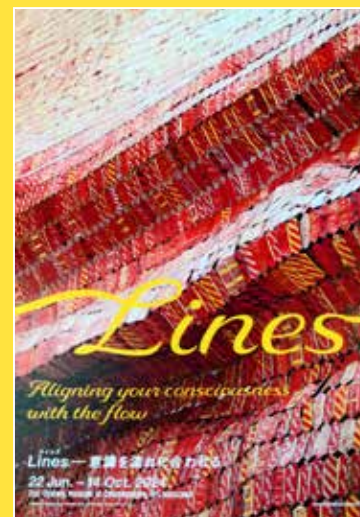
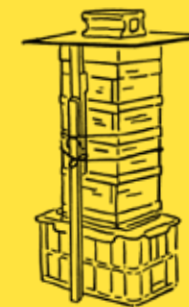
まるびいで養蜂を始めることになり、石川県で、ニホンミツバチを飼育している個人養蜂家に指導をお願いしました。二人で、まるびいの敷地内で飼育に適した場所はないか探してみたところ、南側の辰巳用水の脇が良いということになりました。

6月の初め、白い防護服に身を包み、養蜂家の方と2人でミツバチたちを迎え入れました。新しい環境を気に入ってくれなかったら、すぐに自分の巣を捨てて逃げてしまうと聞き、ゆっくり、慎重に巣箱を設置しました。設置後、ミツバチたちも最初はどことなく慣れない様子でしたが、3日もすると花粉を持って巣箱に帰るようになりました。どうやらこの場所を気に入ってくれたようです。

交流課プログラム・アシスタント 深田 拓哉



巣箱の設置



展覧会
「Lines — 意識の流れに合わせる」
右 / Marguerite Humeau
《ハニー・ホルダー》2023
左 / ポスター

ミツバチというのはどんな生き物なのか？ 専門家にきいてみた…

石川県ふれあい昆虫館は、昆虫の生態を「見る」「触れる」「学ぶ」ことで、自然とのつながりや生き物の多様性を楽しく学べる施設です。昆虫館の専門家をまるびいにお招きしイベントを開催しました。

養蜂家の方の指導のもと、だんだんとハチのことに詳しくなっていました。しかしまだまだわからないことばかり。どうにか知見を深めるためにも石川県ふれあい昆虫館の石川卓弥さんをお呼びし、トークをしてもらうことになりました。

ミツバチをはじめ、様々なハチの習性などのレクチャーをしてもらいました。またケースにいれた、生きているハチを間近に見たりすることができました。こんなにも、まじまじと近くで見ることはないのと、とても新鮮な気持ちになりました。

途中、ケースからハチが逃げるハプニングも！しかし石川さんに虫取り網ですぐに捕獲されてしまいました。石川さんは永遠の昆虫少年のようです。

交流課プログラム・アシスタント 深田 拓哉



イベントにあわせて実施されたニホンミツバチの巣箱の見学会



石川県ふれあい昆虫館の石川卓弥さん



Bees Clubのロゴ

巣箱の掃除隊（ビーキーパー）結成！

ニホンミツバチの巣は、重箱式などの木箱の中に作られます。働きバチは、体の下側にある「**蠟腺**」という部分からロウの小さなかけらを分泌します。それを前足で集めてやわらかくし、口や足を使って形を整え、六角形の巣をつくっていきます。「**巣をいかに良い状態に保つか**」。これが、活動を続ける上で克服すべき、最も重要な課題でした。

Bees Clubでは、有志を募り、「巣箱の掃除隊（ビーキーパー）」を結成しました。手を挙げたメンバーは平尾・喜多・嶋・福井の4名です。週1回の当番制で、スムシ（蛾の幼虫）による巣の食害を防ぎ、巣板を清潔に保ち、さらに鏡で内部をのぞいたり携帯で撮影したりして巣の状態を確認するため、毎週、巣箱の清掃活動を行いました。

用具

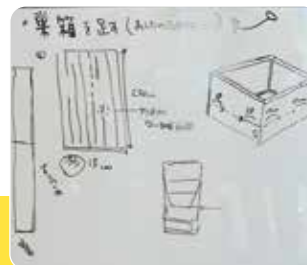
ワイヤーブラシ、スクレパー（金属ヘラ）、バーナー、ブロワー など

方法

- ① ミツバチをあまり刺激しないよう、最初に天板を優しくノックします。
- ② 出入口のストッパーを外し、巣板を引き抜きます。このとき蜂が挟まらないよう細心の注意を払います。
- ③ 抜いた巣板についている蜂をブロワーで優しく追い払い、スクレパーとワイヤーブラシで汚れなどを削り落とします。
- ④ 最後に、バーナーで焦がさないよう軽く炙って殺菌し、巣板を元に戻します。

より多くの蜂たちと接するうちに、その習性や行動が少しずつわかってくると、自然と愛情が湧いてきました。私たちの防護も次第に緩くなり、足首や手首に巻いていたテープもしなくなりました。当初は顔の近くに蜂が寄ってくるだけで恐怖を感じていましたが、最後の頃には慌てることもなく、落ち着いて対処できるようになりました。そして、「よく働いてくれてありがとう」という気持ちとともに、蜂たちが本当に愛おしく感じられるようになりました。

メンバー 福井 有澄



上段／巣箱の製作：ミツバチの成長にともなって増設しました
左／仲良く2人で巣箱掃除！

ミツバチといえばやっぱり…

はちみつは、巣の上部にある六角形の小部屋（巣房）にたっぷり貯められ、表面は薄いロウのふたで封じて保存されています。採蜜のときは、重ねられた巣箱の一番上の段（貯蜜が多い部分）を取り外し、巣板ごと切り取ってはちみつを搾ります。ニホンミツバチの場合は、巣を壊さずに自然に落ちてくるはちみつを布でこして集める「垂れ蜜」と呼ばれる方法で採取します。

私は Bees Club に参加しているものの、蜂は苦手です。でも、蜂蜜は大好きです。まさか人生において、蜂蜜を採取する日が訪れるとは！フルアーマーの喜多さんと深田さんが切り出した蜂の巣は、いっぱい蜜が詰まっていると予感をさせる、深い琥珀色をしていました。隙間なくきれいに並んだ六角形に、包丁でザクザクと切り込みを入れると、想像以上にトローンと蜜がたっぷり垂れました。「今年のは美味しいね」「蜂の巣も食べられるよ」Bees Club の仲間とつまみ食いした蜜の味、私は一生忘れません。

採蜜の流れは、ハチの巣を切り出す → 細かくする → 一晩かけて蜜を滴下 → 布で濾す → 瓶詰、という手順です。

Made in まるびいの蜂蜜、とてもおいしかったです！

蜂さん、どうもありがとうー

メンバー 高橋 友香



① 蜂蜜たっぷりの巣 ② みんなで巣を裁断
③ 布で濾して… ④ 2025年度の蜂蜜できあがり



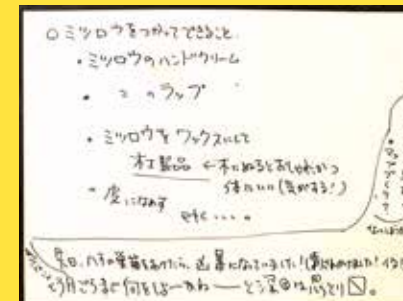
2024年度の蜂蜜 パッケージもつくりました

蜜蝋の利用法いろいろ

蜜蝋（みつろう）とは、巣を作る材料として分泌する天然のロウ（ワックス）のことです。はちみつの甘い香りと保湿性、光沢・防水性・抗菌性などの特性を持ち、化粧品（リップクリーム、ハンドクリーム）、食品添加物、ワックス、キャンドル、エコラップなど、幅広い用途で利用できます。この蜜蝋を使ったグッズづくりにも挑戦しました。

はちみつを取った後の蜜蝋でハンドクリームを作ってみようということになり、まずは蜜蝋を溶かして漉して不純物を取り除こうとしました。しかし、結果は大失敗!!原因は、漉す時に目の細かい布を使ってしまった為、溶けた蜜蝋がその布に吸収されてしまったからです。他で蜜蝋を調達して何とかハンドクリームは完成しました。べとつかずさらっとした使い心地でカサついた肌を潤してくれます。さて、蜜蝋を吸い込んだ布をそのまま捨てるのももったいないので、蜜蝋ラップもつくってみようとなりました。こちらは大成功!今でも飲みかけのカップの蓋として、大活躍してくれています。まるびいずが汗水(?) たらして働いて出来た物を無駄なく活用できて良かったです。

メンバー 喜多 久恵



右/このイラスト通りに上手くいくはず!! でしたが、現実には甘くなかったです…。

左/別の蜜蝋を足して溶かして、容器に入れてなんとか完成。



ミクロの世界！花粉アート！ 金沢の自然を知る！

ミツバチは、花の出す「蜜」とともに、「花粉」も唾液で団子状にして巣に持ち帰ります。集められた「花粉団子」は、幼虫の大切な栄養源として利用されます。私たちは、この花粉を詳細に解析し、訪れた植物の種類を調べることにしました。

2025年8月21日（木）に一般向けの「花粉観察会」を開催しました。当日は、まるびいのニホンミツバチに加え、南町のビル屋上で飼育しているセイヨウミツバチ（協力：金澤やまぎし養蜂場）から採取した花粉団子を、顕微鏡で観察しました（顕微鏡協力：金沢大学）。専門家の木矢剛智先生（金沢大学 准教授）からミツバチのお話を伺ったあと、参加者は自分の手でプレパラートを作成。顕微鏡をのぞいた瞬間、思わず「わあっ!」という歓声が上がりました。花粉は、花の種類ごとになんて違う形や模様をしているのです。

「ミツバチって、こんなにたくさんの種類を集めているんだ!」との声があがり、ミツバチの働きと地域の植物多様性を実感する時間となりました。

イベントのあと、それぞれの花粉について遺伝子解析を行い、植物の特定を進めました（協力：金沢大学がん進展制御研究所）。希望した

小学生には、研究所での遺伝子解析体験会にも参加していただきました。植物が特定されると、ぐっと親近感が湧き、金沢の自然がより身近に感じることができました。

11月3日（月・祝）のオープンまるびいでは、このときの写真をパネル展示し、人気投票「キング・オブ・花粉団子」を実施しました。「一番気に入った写真にシールを貼ってください!」という言葉で、来場者は一瞬にしてミツバチの世界へ引き込まれます。そこから自然に「これはミツバチが集めた花粉団子なんです」「どうして撮ったかという」と話が広がり、最後には金沢の自然へ思いをはせる流れが生まれました。

この日は、大勢の方とミツバチの話ができて、本当にうれしかったです!

メンバー 平尾 敦



オープンまるびいでの展示。右／キングオブ・花粉団子の写真パネルと Bees Club 活動説明パネル。左／花粉写真カードを使ったゲーム。

さあ、飛騨高山へ

2024年に始まった本プロジェクトもいよいよ完結する時期を迎えました。県をまたいでミツバチや巣箱を移動するには、都道府県への届出やダニや病原体の有無を検査することが求められます。これらの手続きを終え、見事、検査をパスしたまるびいずは、いよいよ高山へ移動することに。

10月初めのまるびいずのお引越し当日、まずお昼に巣箱掃除をしました。きれいになって新天地へと旅立って欲しかったので、いつもより念入りにしました。そして、外に出ていたまるびいずが巣箱に戻る夕方にいよいよ移動開始。雨が降り出してしまいましたが、移動中にまるびいずが出てこないように入り口を塞ぎ、車に積み込みました。長い長い飛騨高山までの道のり、何事もなく無事に到着するように祈りながら車を見送りました。

問題なく到着したとの知らせを受けた時は、胸を撫で下ろしました。もう金沢にまるびいずは居ないのに、ミツバチを見かけると思わず微笑んでしまいます。まるびいずありがとう! 元気でね!

メンバー 喜多 久恵



高山からのお便り

2025年12月、引越し先から、まるびいずの様子についての写真とお便りをいただきました。



こちら（高山）は、基本的に朝晩は氷点下になります。寒波の際は、-10度近かったと思います。なので、少し前に日当たりの良い場所に数メートル移動しまして、風よけの囲いと、日当たりを確保しています。

岐阜県高山市 中尾 宏嗣 様



岐阜県高山市に引越した「まるびいず」の巣箱（画像左手前のスチールラックの中）
—2025年12月

明後日朝顔 プロジェクト



2003年、新潟で開催された「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」において、アーティストの日比野克彦氏が新潟県十日町市^{あごみひら}助平地区の住民とともに朝顔を育てる活動として始めたのが「明後日朝顔プロジェクト」です。2005年の水戸芸術館での「HIBINO EXPO 2005 日比野克彦の一人万博」を機に活動の輪が全国へ広がりました。2007年、まるびいの「明後日朝顔プロジェクト21」では、全国11地域から集まった朝顔の苗約1600本が、美術館の円形の建物を囲むように育てられました。以降、金沢市内ではその後も有志が公共施設等で育て続け、2023年からは再びまるびいに戻り、「みらいカフェ」メンバーが中心となり育てています。2024年には、能登半島地震からのより早い復興を願い、珠洲市内の金沢大学能登学舎とまるびいの双方で苗植え式を行い、苗を交換もしました。このように、本プロジェクトは、人と人、人と地域、地域と地域をつなぐ大きなネットワークの象徴となっています。



5月 苗植え 大きく育ちますように!



青い花、赤い花、たくさん咲きました

朝顔の栽培

今年は、私は朝顔のお世話ができませんでした。ただ、みらい畑で五郎島金時や落花生を育ててくれた鶴沢さんから、愛情と水分と栄養のおすそ分けをたっぷり頂いたので、今年も大きく育ち、たくさんの明後日朝顔の種を実らせることができました。来年は、鶴澤さんになって、愛情と水分と栄養をたくさん与えたいと思います。そして仲間を増やして、お世話するバトンをつなげていきたいです。また再来年の休館に向けて、朝顔との過ごし方や、楽しいイベントを考えます。アメニモマケズ、カゼニモマケズ、明後日朝顔とともに頑張ります。

メンバー 高橋 友香



ポットに種まき かわいい双葉



種の収穫 がんばりました!

明後日朝顔全国会議

2025年9月13日(土)～14日(日)に、水戸芸術館にて明後日朝顔全国会議が開催されました。私たちを含め、熊本、水戸、名古屋、千代田、DOOR、さいたま、岐阜、新潟、粟島、姫路など、全国12地域から約60名が参加しました。各地域から、昨年1年間の活動報告が行われ、プレゼンテーション後には投票が実施されました。その結果、朝顔の種の中から「キング・オブ・タネ」が選出され、1位(キング)には粟島が選ばれました。粟島は来年度の全国会議の開催地となります。瀬戸内の島で再会できることを、今から楽しみにしています。

交流課プログラム・コーディネーター 王 馨怡



右/金沢からのキングオブタネの候補
左/2025年明後日朝顔全国会議でキングオブタネのプレゼンの様子

タネの配布

前述の通り、みらい畑で今年も、明後日朝顔たちがたくさんの種を実らせてくれました。ボランティアメンバーたちがそれを探って、「このタネはまるびいに来る前にどこに居たのかな」という視点で仕分けをしました。もと居た場所は、金沢、宇宙、珠洲、千代田、水戸など。一袋10粒ずつを包んで、オープンまるびいの日に備えました。

オープンまるびいの日には架にまだまだたくさんの明後日朝顔たちのツルや葉が繁茂しており、配付場所からガラス越しにその光景を見ることができました。足をとめてくださった来観者に先ず、あの架の朝顔たちが実らせた種です、と紹介を始めました。続けて、これまでに居た場所をご説明した上で、来年の春にお家で植えてみませんか、とお勧めしました。たくさんの来観者が「来年の春に植えるのが楽しみです」と言って、種を持ち帰ってくださいました。来年の夏にたくさんのお家で明後日朝顔が咲き誇ることを間違い無しですね。

ちなみに、金沢の朝顔の種の中では、2010年に宇宙（ISS）へ行った種の子孫として金沢に来たルーツを持つ種が大人気で、“猪の一番”に無くなりました。

メンバー 今井 秀和



折り込められた種たち。来年の夏に綺麗に咲きますように。



種配付の案内。後の架で花の咲き終えた明後日朝顔たちが見守っています。



2024年のプロジェクト紹介冊子。能登復興の祈りが込められています。

みらい畑



まるびいみらい畑は、キッズスタジオの近く、ガラス越しに見える小さな畑です。「自分たちの手で作り、見守り育てる場」の象徴として、季節ごとに変化する姿を来館者に届けています。作物を通じて来館者やご近所の方とのおしゃべりが自然と生まれることもしばしば。さて、今年はどんな種が芽吹いたのでしょうか――。

今年の暑さは本当に大変でした。

毎朝早朝5～6時頃になると、まるびいの周りには、健康のためにウォーキングをする方、愛犬と散歩をする方、夜行バスや電車で遠方から金沢を訪れた方々の姿が見られます。早朝、水やりをしながら、畑の植物の話から始まり、金沢観光の話へと話題が広がります。そんな何気ないやりとりを楽しみにしながら、感謝の気持ちとともに作業を続け、なんと10月半ばに収穫を迎えることができました。収穫を終え

て空になったみらい畑を、葉ぼたんで飾り付けしていたところ、「土を触ったことがない」と話すカップルが声をかけてくださり、楽しそうに手伝ってくれました。声かけが大切ですね。



21歳の21周年をイメージにして
葉牡丹を植えました

① 落花生編

収穫直ぐに食べる事が出来るよう、今年は落花生を5株植えました。

干し落花生はカラカラと音をたてますが、穫れたてをさっと塩茹ですると、殻と実の間にトロトロとした大変甘くて美味しいものを味わうことができます（これは実を保護している渋皮 薄皮 が茹でたり水分を含むと柔らかくなったものです）。塩茹でを食べた人より、喜びの声を聞く事ができ嬉しく思いました。

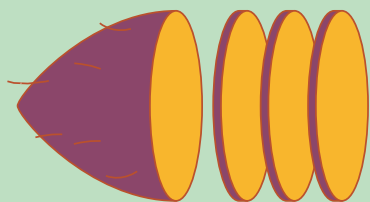
落花生（ラッカセイ）は、花が咲いたあと茎が地面に伸び、土の中で実をつける珍しい植物です。殻付きのものを落花生、殻をむいた実はピーナッツとも呼ばれます。南京豆という名前でも知られています。落花生は生活習慣病予防に役立ちますが一度にたくさん食べないように気をつけましょう。

参考：『違いがわかる辞典』
<https://chigai-allguide.com/cw0507/>



2 サツマイモ編

植えられた五郎島金時は暑い太陽のもと蔓を伸ばし、みらい畑の中では収まりきらず、どんどん外に出ていきました。8月半ば、伸びてきた蔓の節に小さな芋が付くのを防ぐため、「蔓の半返し」という作業を行い、元芋を大きく育てました。「立派な芋蔓ですね。大きなお芋に育っているんでしょうね」水やりのたびに、そんな声をかけてくださる市民の方もいらっしゃいました（笑）



収穫は以下の通り

- (直径 23~25cm) 大 8 個
- (直径 10~20cm) 中 15 個
- (直径 10cm 未満) 小 12 個

芋は1cmほどの輪切りにして焼き芋にし、蜂蜜をトッピングして食べたり、蒸かしていただきました。蒸かして食べるほうが、甘みやホクホク感がより引き立ち、美味しさが倍になったように感じます。本当においしかったです。次は、芋の種類を変えて栽培したいです。

メンバー 鵜沢 一子



みらい畑収穫祭

のびる のびる のびる
芋つるがのびて まるびいを包む



ア・ラ・ラ 落花生は
土の中でこんなにたくさん実るのね

院内学級



「院内学級」とは、病気などにより長期にわたって入院している児童生徒が、在籍している学校と同様の学習を続けられるよう、病院内に設けられた学級です。みらいカフェでは、2022年度より、入院中の子どもたちに美術館の魅力を届けることを目的に、オンラインのライブ配信で病院とまるびいをつなぎ、まるで館内を訪れているかのような体験ができる企画「まるびい院内学級」を継続して実施しています。



右/2025年1月「カラー・アクティビティ・ハウス」の近くからオンライン鑑賞の様子
左/2025年1月「スイミング・プール」の上から実況中継

2025年1月、院内学級の小・中学生の生徒さん達と散策・作品鑑賞を行いました。まずは、本多通り口近くにある《カラー・アクティビティ・ハウス》の鑑賞からスタート。冬の空にも映える鮮やかな色の壁の内側をスタッフが通り抜けて、「どんな色に見えるかな？」まるびいに関するクイズを交えておしゃべりしながら、次に《スイミング・プール》へ。上から水面をのぞいてみると「中に人がいる!」ワクワクして私達もプールの下へ潜入。青いプールの中をゆっくり遊泳しました。最後に「雲を測る男」を探しに行きました。まるびいの上で金色に光る男の人が物差しで測っています。「雲の大きさ、今日はどのくらい?」オンラインで聞こえてくる生徒さん達の「へえー」「えー!」「ふうーん」という声がうれしくて、参加した人みんなの心があたたかくなりました。

この企画は、2026年1月にさらにバージョンアップして行いました。金沢市内の生徒さんに加えて、千葉県の内学級の生徒さんにも参加いただきました。今度は「まるびい」の実物の作品に会えるといいね!

メンバー 柄田 亜希代



2026年1月千葉と金沢をオンラインで繋げて、まず自己紹介

SIDE CORE

とともに「野焼き」



SIDE COREは、ストリート・カルチャーを切り口として「公共空間における表現の拡張」をテーマに、都市や路上で生まれる表現の可能性を探求し、公共空間を舞台としたプロジェクトベースの作品を多数発表しています。まるびいにおいても、SIDE CORE展「Living road, Living space / 生きている道、生きるための場所」（2025年10月-2026年3月）が開催されました。それに先立ち、2025年3月22日（土）に開催された「野焼きイベント」に、みらいカフェのメンバーも合同イベントとして参加させていただきました。今回の「野焼き」は、2024年度のAIR KANAZAWA事業（滞在交流型プログラム：アーティスト・イン・レジデンス）として、震災後の能登半島でのリサーチをもとに、フィールドワークの一環として実施したものです。

「野焼き」では、SIDE COREメンバーがリサーチやボランティア活動を通じて採取した災害土砂の粘土や瓦礫となった木材を炭化し、震災がもたらした資源を活用する実験的な試みを行いました。火を囲むことで生まれる対話の場を通じて、土地の記憶や復興のあり方について共に考える機会としたイベントです。

今回のイベントでは、野焼きで使うものと同じ、震災瓦礫を炭化した炭を使わせてもらい、焼き芋とピザを焼いて、野焼きを見にきた来場者に振る舞うという活動を行いました。プロジェクト工房前の屋外での野焼き開催のため、火に寄せられて多くの来場者があり、みらいカフェメンバーも忙しくピザを焼き、楽しく来場者と交流していました。参加したみらいカフェメンバーは、SIDE COREのメンバーと一緒に準備をしたり、様々な来場者と触れ合ったりと、とても有意義な時間を過ごすことができ、大変思い出深い活動となりました。

まるびい みらいカフェ アシスタント・スタッフ 渡辺 秀亮

野焼き用の炭を割る SIDE CORE「DIEGOさん」、「JANGOさん」とみらいカフェメンバー



交流課スタッフより

「まるびい みらいカフェ」は、まるびいと金沢の街の、より良い「未来」について考える人々が集まる場所や場所の総称です。

開館10周年を迎える2014年の春に、このような言葉を掲げて活動をスタートさせて10年間以上たちました。その中で「未来を考えるタネ」として親しんできたのが「みらい畑」です。美術館を訪れる人との会話も楽しみながら畑で様々な草花を育てるうち、「明後日朝顔」やニホンミツバチという新たな生命にも関わるようになりました。

私はアートというのは「生命のふしぎ^{いのち}」から生まれるものだと思います。それは「多くの生命^{いのち}がつながりあっているこの世界とは、一体何なのか!？」という問いから湧き出すものを、色や形、言葉や音や身体の動きなどで表したものとイえるでしょう。美術館の展示やパフォーマンスで世界の現在(いま)を表すアートに日々刺激を受けているメンバーのみなさんが集って話し合い、そこから自分たちで見つけたことや創ってきたこと。これらはまさに「生命のふしぎ」に触れた時間がぎゅっと詰まっています。これらが次の「未来のたね」になり、さらに多くの人たちと新たな「ワクワク・ドキドキ」を育ててくださればと願っています。

交流課長 チーフ・エデュケーター 木村 健

編集後記

本号の編集を担当しました、みらいカフェメンバーの平尾敦です。今回、久々に「まるびい みらいカフェだより」を発行しようという話の発端は、みらいカフェ設立当初のメンバーであり、この集まりに思い入れが強い仁歩義晴さんのひとことでした。

——「Bees Clubの活動は近年まれに見る事業だから、記録を残すべきだよ。」さらに仁歩さんからは、「この記録集を養蜂でお世話になった太田邦夫さんに送り、メンバーからの感謝を伝えよう!」という提案もあり、皆で賛同しました。そこから急遽、各メンバーが分担して原稿を執筆し、どのような形で発表するのがよいかを議論しました。その結果、内容を拡大させ「まるびい みらいカフェだより」シリーズとして発行し、本ボランティア活動の記録を残すことにしました。みらいカフェは2014年に始まり、当時の活動の様子は「まるびい みらいカフェだより #0～3」にまとめられています。また、Youtube「みらいカフェチャンネル」という素敵な紹介動画も制作されています。これらは現在でもホームページ上で公開されており、当時の活動の熱気と多彩な取り組みの様子が伝わってきます。関係者のインタビューも満載で、あらためて素晴らしい記録だと感じました。「きちんと記録に残し、次の人たちに伝えるべきだ!」改めて仁歩さんの言葉の重さを感じました。今回は、かつてのような詳細な記録集には及びませんが、Bees Clubの活動を記念して、「#4」にあたるこの号を発行することができました。ささやかながら、その志を受け継ぎ、未来への橋渡しとなれば、と思います。

執筆・編集にご協力くださった皆さま、そしてこれまでみらいカフェを支えてくださったすべての方々に、心より感謝申し上げます。

メンバー(編集担当) 平尾 敦



2024年度～2025年度
まるびい みらいカフェ
メンバー・スタッフ一覧

メンバー (50音順)

浅野 さくら	杉本 詩音
今井 秀和	高橋 友香
鶴沢 一子	直川 泰久
江濱 優	張 昕
川上 大介	柄田 亜希代
加藤 大貴	對木 洋子
喜多 久恵	仁歩 義晴
木本 葵	平尾 敦
黄 中道	福井 有澄
嶋 哲昭	安村 大樹
柴野 英雄	

スタッフ (金沢21世紀美術館)

木村 健
矢野 佑輔
王 馨怡
深田 拓哉
渡辺 秀亮

デザイン: 神子澤 知弓

印刷: グラフィック

編集: 平尾 敦
王 馨怡

発行: 金沢21世紀美術館

[(公財)金沢芸術創造財団]

〒920-8509 石川県金沢市広坂 1-2-1

Tel: 076-220-2800

<https://www.kanazawa21.jp/>

2026年3月発行

ま る び い み ら い カ フ エ だ よ り 2024 ▶ 2025